

Title	語文五十輯を迎えるのに寄せて : 創刊のころ
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 50 p.1-p.2
Issue Date	1988-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68774">https://hdl.handle.net/11094/68774</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 語文五十輯を迎へるに寄せて

——創刊のころ——

田 中 裕

大阪大学文学部が発足したのは昭和二三年九月、当時九州大学と兼任の小島吉雄先生が専任教授として来任されたのが翌二四年四月、語文創刊が二五年十一月で、それは国文学科、研究室の定礎のために渾身の努力を傾けられてゐた御企画の一環であつた。当初の発行者は邦進社の前田春雄氏で、二八年七月刊の第九輯から文進堂同勘次氏に替つてゐるが、今度その間のいきさつを改めて林和比古先生に伺ふことができた。先生はこの前田兄弟と御自著の出版のことかねて面識があり、戦後春雄氏がシベリヤ抑留から歸つて文進堂内に邦進社を置き出版を再開したのを機に、雑誌発行のことを説いて兄弟を小島先生に紹介したのであつた。その後春雄氏が業を廃されたあとを令兄が引受けて三十余年に及んだのであるが、同氏の誠意、芳情には私個人としても忘れられないものがある。

語文創刊は戦後めざましい復興を見せつつあつた国文学界の動向と揆を一にするもので、在阪大学に限つても二五年に大阪市立大学人文研究、関西大学国文学、二六年に女子大文学が創刊されたと記憶するが、小島先生は語文をただ教官、学生のためばかりでなく、広く学界へ開かれた研究誌にする御考へが強く、前年秋に発会し、やがて自身その中心となつて尽力されることになる大阪国文談話会との提携も密にし、第三輯（二六年

七月刊)の「契沖阿闍梨特輯号」など前年同会の主催した記念講演会での諸大家の講演を母胎に編集されたものであった。当日の澤瀉久孝先生の御講演も、テープとてない頃で学生に筆記させたものをお目通し願ったのであるが、誤りが多くて結局書き下しましたと認めて、いつもの毛筆書きの見事な原稿を送つて下さったのは汗顔の至りであった。語文の前記御趣旨は「投稿規定」にも反映されて学外からの投稿も多く、宇佐美、犬養、林、八木、私が編輯委員となつてそれぞれ関係の論文を閲覧し、輪番で編輯後記を書いた。編集長格は宇佐美先生で編集会議となると教養部の現イ号館最上階にあつた先生の研究室に伺ひ、はては遅くまで雑談に花を咲かせた。

いま旧号を綴いてゐると第十輯(二九年一月刊)を文部省科研費による共同研究の発表の場として「懷徳堂の和学」の特集にあてると共に「十輯にまで漕ぎつけた」ことを自祝して、はじめて小島先生が後記をものされてゐるのや、第十三輯(二九年十二月)の彙報に犬養先生の「大阪大学万葉旅行の会」の第廿三回に至る僅し一覽の掲げられてゐること、第十二輯(二九年八月)に卒業生の論文第一号として今井優君のが掲載されてゐることなどが目に著き、感慨を催すのである。

その後語文の内容、性格も徐々とした変遷を閲してゐる筈であるが、今度五十輯を迎へるのを機に国語国文学会誌として力強く再出発する由、信多教授をはじめ関係の皆様の御英断、尽瘁に深い敬意をささげる一方、一層の発展を祈る次第である。

(本学名誉教授・梅花女子大学教授)